琉球・沖縄に関する古地図資料の集成

研究代表者：長谷川 孝治・神戸大学・文学部･教授

１．研究項目：A03　琉球・沖縄の歴史的文物の情報化

２．研究課題名：琉球・沖縄に関する古地図資料の集成（課題番号：07205101･08205101･09202101）

３．研究期間：平成７年度～平成９年度（1995～1997）

４．交付研究費：平成７年度　2,000 千円
　　平成８年度　2,100 千円
　　平成９年度　2,100 千円　　合計　6,200 千円

５．研究組織(氏名：所属機関・部局・職)
（研究代表者）長谷川　孝治：神戸大学・文学部･教授
（研究分担者）金田　章裕：　京都大学・文学部・教授
（研究分担者）平岡 昭利：下関市立大学・経済学部・教授(平成7･8 年度研究分担者)
（研究分担者）町田 宗博：琉球大学・法文学部・助教授(平成7･8 年度 研究分担者)
（研究分担者）大城 直樹：神戸大学・文学部・助教授(平成8･9 年度 研究分担者)
（研究協力者）三好 唯義：神戸市立博物館・学芸員(平成8･9 年度研究協力者)
（研究協力者）小野田 一幸：神戸市立博物館・学芸員(平成9 年度 研究協力者)

平成７年度は合計４名、８年度は合計５名の研究者で計画を推進したが、最終年度に当たる平成９年度では、それらの成果のまとめに主眼を置くため、近畿地区の３名に研究者を絞り、連絡を密にして研究の集大成を図った。また、日本最大の古地図コレクションを有する神戸市立博物館に関しては、学芸員２名に研究協力者として協力を得ることができた。

６．研究目的

歴史情報としての地図・地誌類の重要性はいうまでもなく、また近年県史・市町村史の一環として、絵図・地図篇や地誌篇が刊行されることが多くなっている。こうした研究上並びに社会的要請の増大に対応して、沖縄においても「八重山古地図展」（1989 年）などが開催されるに至っている。しかし、古代以降、とりわけ近世に関する琉球・沖縄の古地図資料が総合的に収集、検討されているとは言い難いのが現状である。環東シナ海世界、東アジア世界ひいては地球的規模の視野で琉球・沖縄の歴史的位置付けを行うためには、地図に関する情報収集と研究は不可欠な状況にあるといえよう。

本研究は、以上のような背景をもとに、近世以降を中心とするヨーロッパ系および東アジア系の世

界図、日本図、琉球図、さらには地元作成の風水図・村絵図から明治期の地籍図に至るまでのさまざまなスケールの絵図・地図類を収集し、これら古地図資料群をデータ・ベース化すると同時に、文字史料との関連で捉えることで、歴史資料としての古地図の可能性を追求していくことを目的とする。

琉球は、日本、中国さらには東南アジアを経由したヨーロッパという三者の結節点にあるため、さまざまなスケールの絵図・地図類が近世以降多数作成されてきた。しかしこうした古地図資料については、従来体系的な収集・整理がなされていない。本研究では琉球・沖縄の歴史情報研究の中でも遅れが目立つ、この古地図資料群に焦点を当てて、整備していくことにする。こうした一次的な目録作成を通じて、近世琉球の全体像や地域像、さらに都市－農村関係の在り方などを分析していく視座を獲得していくことが期待される。

本研究の独自性は、以下の２点に要約できる。

１）絵図・地図の史料論　　歴史研究においては近年、絵図・地図が注目されているが、それらを歴史研究の素材としてどのように扱うかという点については十分に検討されていない。本研究では、琉球・沖縄を事例としながら、この膨大な古地図史料群をデータ・ベース化すると同時に、文字史料との関連、対比において捉えることで、歴史史料としての古地図の可能性を追求していきたい。

２）琉球・沖縄研究　　日本の最南部にある琉球は、日本、中国さらには東南アジアを経由したヨーロッパという三者から注目される位置にあり、それらの接触点となってきた。こうした状況からさまざまなスケールの、琉球を視野に含む絵図・地図類がとりわけ近世以降数多く作成されてきた。しかしこうした古地図資料については、従来ほとんど体系的な収集・整理がなされていないといえる。本研究のように琉球・沖縄の歴史情報収集の中でも遅れが目立つ、この古地図資料群に焦点を当てて、整備していくことは、多大の意義を有すると考える。

７．研究計画の概要

平成７年度および８年度において、沖縄県立図書館・博物館、琉球大学、宜野湾市教育委員会、今帰仁村歴史文化センター、名護市史編纂室をはじめ、鹿児島県立図書館、佐賀県立図書館、京都大学総合博物館、海上保安庁など各地の所蔵機関で琉球・沖縄を含む絵図・地図類の現地調査を推進してきた。

こうした実績を踏まえ、平成９年度には上記以外の調査対象所蔵機関に範囲を拡大すると同時に、国内最大の古地図コレクションを有する神戸市立博物館で学芸員２名の研究協力者の協力をえて、集中的な調査を実施する。また平良市・城辺町教育委員会や那覇市史編集室など沖縄県内の所蔵機関でも悉皆調査を継続する。

各機関では古地図を熟覧すると同時に、地図の全体あるいは細部の写真撮影を行い、記載されている地名や文字注記などの確実な地図情報を地図目録カードに整理する、という基礎作業を第一段階として行っている。その上でそれら情報を利用してデータ・ベースに集大成すると同時に、研究成果報告書という冊子体の形でも成果を公表するべく、準備を進める。

こうした研究計画を推進するため、得られた古地図情報を実際にパソコンにインプットするための研究打合せ会をできる限り頻繁に開催し、問題点を摘出しながらより完全なデータ・ベースの完成を目指すよう努める。

８．研究の分担

	現在の専門	役割分担
長谷川 孝治	地図史	総括、近世ヨーロッパ系地図類担当
金田　章裕	人文地理学	中・近世東アジア系地図類担当
平岡　昭利	人文地理学	近世島津藩作成地図類担当
町田　宗博	集落地理学	近世・近代琉球地図担当
大城　直樹	社会地理学	近世・近代風水図類、データ化担当
三好　唯義	地図史	基準データ作成
小野田 一幸	地図史	基準データ作成

９．研究経過

本重点領域研究においては、平成７年度に「琉球・沖縄に関する地図・地誌資料の集成」班、平成８・９年度に「琉球・沖縄に関する古地図資料の集成」班を組織し、沖縄をはじめとする国内の主要な古地図所蔵機関で精力的に調査を行ってきた。

琉球・沖縄に関する古地図は極めて多量に残存しており、本研究班では近世以降を中心とする (1)ヨーロッパ系および東アジア系の世界図、日本図、中国図などのマクロ・スケール図、 (2)琉球図、南西諸島航海図などのメソ・スケール図、 (3)風水図、地籍図などのミクロ・スケール図を全国の所蔵機関で可能な限り悉皆調査を行い、それら古地図資料を系統的に分類・整理してきた。具体的には各図を熟覧・撮影し、その後トレース図を作成し、さらに記載されている地名や文字注記を抽出する作業を続けてきた。現在はこれらの成果を、①所蔵機関、②請求記号、③作成年、④作成者、⑤寸法、⑥主要地名などの項目別に体系的に目録カードに整理し、それらをデータベース化、さらに冊子体での研究成果報告書の刊行を目指している。

こうした調査の結果、とりわけ沖縄においては、近世以降の風水図や明治期作成の地籍図など、ミクロ・スケール図が未整理のものを含めて多数残存していることが判明してきている。またこうした一次的なデータ・ベース作成を通じて、近世琉球の世界や日本、中国における位置付けと意味、また琉球そのものの全体像や地域像、さらに集落の社会的・文化的コンテクストでの解釈および都市ー農村関係や土地所有関係の在り方などを分析していく視座を獲得していくことができるものと期待される。

各研究分担者ごとの研究経過、研究成果、情報化資料の概要・主要資料の解題等は、以下の通りである。

[長谷川孝治]

平成７年度は、当初の研究計画では琉球・沖縄の古地図資料と同時に、地誌資料の集成も視野に置いていたが、前者の資料が膨大かつ広範に所蔵されており、また後者は歴史関係研究班との重複が懸念されたため、絵図・地図資料に限定して資料収集に努めた。

資料調査は、沖縄県立図書館、沖縄県立博物館、宜野湾市・名護市・今帰仁村各教育委員会など、沖縄県内の主要な地図資料所蔵機関を中心に、神戸市立博物館、国立国会図書館など各地で精力的に行い、琉球・沖縄関係古地図の目録カード化を推進した。

平成８年度は、前年度の成果を継承しながら、所蔵機関ごとの古地図の熟覧調査とカード化ならびにスライド撮影を行なった。具体的には、神戸市立博物館所蔵の古地図類を班全体の基準とすべく、カード化と撮影を継続した。また平良市総合博物館では、従来報告されていなかった、明治30年代の地籍図を調査し、スライドに納めた。平成９年度は、研究協力者である神戸市立博物館の学芸員の補助により、所蔵古地図の調査を推進しつつある。また平良市総合博物館、城辺町教育委員会に所蔵される明治期地籍図の悉皆調査を完了した。

以上のような研究成果は、以下のような形で報告・公表した。

（1）平成８年１２月９日　総括班主催「沖縄の歴史情報」研究会　全体会議
　　「古地図に描かれた琉球」（於：富士写真フィルム本社ホール）

（2）平成９年１２月１４日　「沖縄の歴史情報研究」総括班研究会
　　「琉球・沖縄の古地図資料の多様性」（於：沖縄国際大学）

また、ヨーロッパ系世界図の中の日本・琉球表現に関しては、C．クーマン著、長谷川孝治訳『近代地図帳の誕生』（臨川書店）の中にも、成果が生かされている。

<情報化資料の概要等>

（1）神戸市立博物館

日本最大の古地図コレクション（約８，０００点）を有する神戸市立博物館は、古地図関係資料の集成を行なうには、いわば基準となるべき所蔵機関である。南波松太郎コレクション、秋岡武次郎コレクションに新収蔵古地図を含む全所蔵作品リストは、すでに『神戸市立博物館　館蔵品目録　地図の部１～１３』（１９８４～１９９７年）の形で公開されている。その中から主要な琉球関係図を調査した結果が、下記の表である。

神戸市立博物館所蔵　琉球関係図（抜粋）

請求記号	名称	刊行年	刊行者	備考
1・7- 3(新)	TYPVS ORBIS TERRARVM (ｵﾙﾃﾘｳｽ世界図)	(1587)	A. Otrelius	
2・7- 6(新)	TOTIUS ORBIS COGNITI UNIVER- SALIS DESCRIPTIO(ﾒﾙｰﾗ世界図)	(1905)	P.Merula	
3・７- ７(新)	NOVA TOTIVS TERRARVM ORBIS GEOGRAPHICA AC HYDROGRAPHICA TABVLA(ﾎﾝﾃﾞｨｳｽ世界図)	(1630)	H.Hondius	
4・7- 12(新)	NAVIGATIONES PRAECIPVAE EV- ROPAEORVM AD EXTERAS NATIO- NES(ｼｪｰﾚﾙ世界図)	(C.1700)	H.Scherer	
5・7- 15(新)	PLANIGLOBII TERRESTRIS CUMU- TROQ HEMISPHAERIO CALESTI GENERALIS EXHIBITIO(ﾎｰﾏﾝ世界図)	(C.1730)	I.B.Homann	
6・7-19(新)	ORBIS VETIS(ﾞｳｫｰｺﾞﾝﾃﾞｨ世界図)	1752	R.de Vaugondy	
7・7-21(新)	MAPPEMONDE(ﾄﾞ･ﾘｰﾙ & ﾋﾞｭｱｼｭ世界図)	1785	G.de L'Isle & P.Buache	
8・10- 3(秋)	CHINAE(ｵﾙﾃﾘｳｽ中国図)	(1584)	A. Ortelius	
9・10- 4(秋)	CHINA REGIVM(ｵﾙﾃﾘｳｽ中国周辺図)	(1593)	A. Ortelius	
10･10- 6(秋)	ASIA(ﾌﾞﾗｳ･ｱｼﾞｱ図)	(1635)	J.Blaeu	

11・10- 7(秋)	INDIA quae ORIENTALIS(ﾎﾝﾃﾞｨｳｽ・ｱｼﾞｱ図)	(1638)	H.Hondius	
12・10- 12(秋)	ASIAE Nova Descriptio(ﾃﾞ=ｳｨｯﾄ ｱｼﾞｱ図)	1660	F.de Wit	
13・10- 13(秋)	MAGNAE TARTARIAE MAGNI MOGOLIS IMPERII(ﾃﾞ=ｳｯｨﾄ・大ﾀﾙﾀﾘｱ・ﾓﾝｺﾞﾙ帝国図)	(1660)	F.de Wit	
14・10-14(秋)	INDIAE ORIENTARIS(ﾌｨｯｼｬｰ・東ｱｼﾞｱ図)	(1680)	N.Visscher	
15・10-15(秋)	Accuratissima totius ASIAE TABULA(ﾃﾞ=ｳｨｯﾄ・ｱｼﾞｱ全図)	(1680)	F.de Wit	
16・10-17(秋)	CARTE・・・Empire de la CHINE (ﾆｺﾗｳ・中国帝国図)	(1688)	J.Nieuhof	
17・10-18(秋)	MARE DEL SVD, detto altrimenti MARE PACIFICO(ｺﾛﾈﾘ・太平洋図)	(1690)	P.M.Coronelli	
18・10-20(秋)	PARTE ORIENTALE della CHINA(ｺﾛﾈﾘ・東中国図)	(1690)	P.M.Coronelli	
19・10-22(秋)	CHINA Veteribus SINARVM REGIO(ﾒﾘｱﾝ・中国図)	(17 世紀)	M.Merian	
20・10-23(秋)	INDIAE ORIENTALIS NECNON INSULARVM ADICENTIVM(ﾀﾞﾝｹﾙﾂ・東ｲﾝﾄﾞ図)	(17 世紀)	T.Danckerts	
21・7-25(新)	IAPONIA NOVA DESCRIPTIO(ﾔﾝｿﾝ日本図)	(1647)	J.Jansson	
22・7-26(新)	ROYAUME DU IAPON(ﾌﾞﾘｴ日本図)	(c.1650)	P.S.J.Briet	
23・7-28(新)	Carta particolare della Grand Isola del Giapone e di Iezo…(ﾀﾞｯﾄﾞﾘｰ日本及ﾋﾞ蝦夷図)	(1661)	R.Dudley	
24・7-30(新)	ISOLA DEL GIAPONE E PENSOLA DI COREA(ｺﾛﾈﾘ日本図)	(1692)	V.M.Coronelli	
25・7-31(新)	IAPONIA GEGNVM(ｺｳﾞｧﾝ=ﾓﾘｴ日本図)	(c.1700)	I. Covens & C.Morier	
26・7-32(新)	LE JAPON DEVIS* EN SOISSANTE ET SIX PROVINCES(ﾚﾗﾝﾄﾞ日本六十余州之図)	(1715)	II. A. Reland	
27・7-37(新)	A New and Accurare Map of the EMPIRE of JAPAN(ﾎﾞｰｴﾝ日本帝国図)	(1747)	E.Bowen	
28・7-41(新)	L'EMPIRE DU JAPON(ｳﾞｫｰｺﾞﾝﾃﾞｨ日本図)	1778	R.de Vaugondy	
29・5-164(南)	琉球国図			大東輿地図輿誌図
30・5-171(南)	琉球国図			
31・2-10(南)	琉球国全図	天明 5 1785	須原屋市兵衛 (林子平)	
32・2-12(南)	琉球国之図	明治 6 1873		
33・2-13(南)	琉球諸島全図			
34・2-14(南)	沖縄縣管内全図	明治 18 1885	久米長順	

（2）平良市教育委員会所蔵地籍図

現在、平良市総合博物館に委託・保管されている明治期作成の地籍図は、全部で 178 葉ある。そのうち明治 35 年に作成された原図は 64 葉、その後の写図が 114 葉である。このすべてについて閲覧調

査を行い、①番号、②名称、③縮尺、④方位、⑤作成年、⑥作成者、⑦製図者、⑧添紙、⑨法量などの項目に整理し、全体あるいは部分の撮影を行なった。

（３）城辺町教育委員会所蔵地籍図

城辺町教育委員会に保管されている明治期作成の地籍図は、全部で 155 葉ある。そのうち明治 35 年に作成された原図は 35 葉、その後の写図が 120 葉である。このうち原図についてのみ閲覧調査を行い、平良市所蔵図と同じく番号、名称、縮尺、方位、作成年、などの項目に整理し、全体あるいは部分の撮影を行なった。

［金田章裕］

分担課題は、研究課題「琉球・沖縄に関する古地図資料の集成」のうち、「中近世東アジア系地図類」である。具体的には、日本の古地図の性格・機能の分類・分析と、京都大学文学部博物館(改組により京都大学総合博物館)所蔵古地図のうちの琉球・沖縄に関する古地図資料の集成であった。本研究開始後の平成 8 年度末、京都大学付属図書館に 511 点の古地図(複製を含む)を含む室賀コレクションが購入された。まだ未整理ではあるが、これも調査対象に含め、順次検討を進めている。

日本の古地図の性格・機能については、「絵図・地図と歴史学」(『岩波講座・日本通史　別巻 3　史料論』1995)として公刊したが、そのうちの琉球・沖縄についての概要は次の如くである。

18 世紀以前の日本の古地図は、大別すると世界図、日本図、小地域(国以下)図に分けられる。琉球は、明暦 2 年(1656)ごろ刊の日本図に「里うきう」として記されているのを始め、数多くの刊行日本図に記されるようになった。その背景には、島津の琉球支配開始後に作成された正保国絵図に琉球が含められた事実がある。同図はとりわけ詳細な国土把握の原点であり、琉球の全貌を示す地図として、最古・最大のものである。しかし、琉球については東アジア製の世界図(アジア図)には早くから登場しており、1471 年の申叔舟『海東諸国紀』、1584 年のマテオ・リッチ『坤輿万国全図』などが広く知られ、大きな影響を与えていた。

琉球国内で作成、使用された小地域の地図は多くないが、「首里古地図」などが貴重な例である。

<情報化資料の概要等>

(1)京都大学総合博物館所蔵　琉球関係図

(2)京都大学付属図書館所蔵　琉球関係図抄

［平岡昭利］

平成７年度は、鹿児島県立図書館（９月２４日～２７日、１０月１８日ー２０日)、佐賀県立図書館（１０月１１日、１１月２１日）所蔵の琉球、沖縄関係地図について検索し、撮影が可能なものについては、撮影した。

平成８年度は、検索の範囲を西日本地域に拡げて、各地の公立図書館や大学図書館に出向き、琉球、沖縄関係地図の所在の確認作業と地図の撮影を継続した。調査地は、長崎県立図書館、長崎市立博物館、長崎県立美術博物館（１２月１３日～１５日、2月6日～7日)、島原市立図書館（１０月１２日)、大阪府立図書館（2月２２日～２４日)、広島大学文学部地理学教室（１２月２日～４日)、福岡市立博物館（１２月２１日）などである。

現在、収集した地図のデータや写真の整理を行っている。調査で検索した地図のうち、鹿児島県立図書館所蔵「大島古図」（３５０×１５９㎝）は、奄美大島の古地図としては詳細で資料的価値がきわめて高く、調査の最大の成果である。なお、沖縄を含めた九州各地の明治期と現在の地形図を比較して、地域変貌を考察した平岡昭利編『九州―地図で読む百年―』（古今書院、1997 年）を刊行した。

<情報化資料の概要等>

（1）鹿児島県立図書館（本館）

①「大島古図」（請求番号　Ｋ２９８４オ、寸法１５９×３５０㎝）

奄美大島についてケバ式を用いた詳細な地図である。耕地は黄色で着色され、航路、道路は赤線で書かれている。小地名まで詳しく記載され、貴重な地図であるが傷みがひどい。

②「琉球国大島絵図」（同　Ｋ２９１ナ、５９８×３１２㎝、１８４５年）

江戸幕府の命じた元禄の国絵図の一つ。奄美大島、喜界島、徳之島、沖永良部島、与論島が描かれている。海岸は、岬や小さな岩礁までも、港は深さや規模、停泊の可否、港間の距離などが細かく記載されている。

③「南島海路略図」（同　Ｋ２９９２サ、３６×３１８㎝、巻物）

鹿児島から琉球への海路と島々を描いた巻物で、資料的価値が高い。

④「薩琉海路図」（同　Ｋ２９サ１９、４７×３４８㎝、巻物）

③と同じく、琉球への海路と島々を描いている。

⑤「徳之島古図」（同　Ｋ２９８４ト、５３×７４㎝）

「与論島古図」（同　Ｋ２９８４ヨ、５３×７３㎝）

徳之島古図は、旧村名、道路、港の規模、状況が記載されている。与論島古図は、旧村名と道路、航路が簡単に描かれている。

⑥「御領内薩隅日琉球島々路程全図」（同　Ｋ２９サ８８４、１８３５年、巻物）

島津藩領の薩摩を黄、大隅を茶、日向を赤、奄美を橙、琉球（沖縄本島以南）をうす桃に区分して着色している。道路や航路が赤線で描かれている。鹿児島からトカラ列島を経由して奄美へは、２ルートあったことを示している。

（2）鹿児島県立図書館奄美分館（名瀬市）所蔵

①「大島明細地図」（請求番号　Ｋ２９１コ、小橋謙吉編、９８×３６㎝）

②「大島郡有良村図」（同　Ｋ２９１ア、有良村作成、冊子）

（3）佐賀県立図書館所蔵

①「琉球絵図」（請求番号　鍋９９５．８－１１９－２、２１０×１１０㎝）

航路を中心に島々を描いている。島津氏直轄の奄美大島、喜界島などは緑色で着色され、琉球と（沖縄本島以南）と区別している。奄美大島は、詳細に地名が記載されている。八重山諸島の海には緑で点描されているが、これは珊瑚礁を表したものである。

②「琉球三省三十六嶋之図」（同　蓮９９５．８－７－２、８１×５３㎝、１７８５年、林子平）

『三國通覧図説』の付図である「三國通覧輿地路程全図」の一部である。琉球を中心に環東シナ海の状況が描かれている。

（4）長崎県立博物館所蔵

①「航路海路図」（請求番号　図７５、８９×６７㎝）

１６００年代後半にヨーロッパで作成された東南アジアの航海図を模写したものと考えられる。中国地名を除き、地名はカタカナで表記されている。
②「中国本邦古図」（同　図４５、８０×１１０㎝）
中国を中心に、日本、朝鮮など東アジアを描いたもので、特徴ある中国図に日本図を組み入れている。琉球が日本の領域外に位置していることは興味深い。
（５）福岡市立図書館所蔵
①「琉球全図」（請求番号　８７Ｂ１９０７、５３×７７㎝）
②「琉球之図」（同　８８Ｂ２２２７、３２×４０㎝）
③「輿地図」（琉球国）（同　８８Ｂ２２３５、３９×４６㎝）
④「海軍水路寮測量図　八重山全島図・琉球国運天港之図・八重山島石垣港之図・大琉球那覇港之図・琉球群島西部慶良間海峡図・奄美大島名瀬港図等」

［町田宗博］
平成７年度は、沖縄県立図書館、沖縄県立博物館、今帰仁村歴史文化センター、名護市教育委員会などで地図情報の収集を行い、平成８年度は、琉球大学付属図書館における地図関連資料の収集のほか、宜野湾市教育委員会における明治期作成の地籍図を閲覧し、可能なものについては、複写した。平成９年度は、琉球大学付属図書館において、他機関所蔵の複写図を含め、同館所蔵の地図関係資料の目録作成と複写作業を行い、現在、これらの作業を継続中であつ。
これまでの調査により、石垣市、勝連町、今帰仁村などの明治期作成地籍図の存在が知られていたが、沖縄全域における、残存状況が明確になりつつある。調査の過程で、集落を単位とした1／6,000、1／1,200、1／600 スケールの図が確認できた。さらに、これらをベースに編集されたと思われる 1／60,000 図も確認し得た。これらの地図は、集落レベルでの、近世から連なる土地利用の様相を究明する貴重な資料である。
<情報化資料の概要>
（１）沖縄県立図書館
①「久茂地村屋敷図」　元は、東恩納寛惇氏の所蔵。近世における大縮尺の集落図。
②「薩摩藩調整図」　東恩納寛惇氏が東京で入手した彩色図。杣山の記載がある。
（２）沖縄県立博物館
①「渡　航海図」　那覇より福州に至る海路図。
②「琉球明細総図」　口之島から八重山に至る海路図。
③「琉球那覇港及び首里城間之図」　1／10,000
（３）今帰仁歴史文化センター
村図、字図、見取図などの地籍図を収録展示。一部、近世作成と思われる図を含む。
（４）宜野湾市教育委員会
①「宜野湾間切字地泊村字兼久原全図」（１／１，２００）
②「中頭郡宜野湾間切字地泊村全図」（１／６，０００）
③「宜野湾間切字地泊村字宇地泊全図」（１／１，２００）
④「宜野湾間切字宇地泊村濱原全図」（１／１，２００）

（5）琉球大学付属図書館
①「勝連町地籍図」、明治３６年。
②「八重山地図」、宮良殿内文庫。

［大城直樹］
平成８年度は主として沖縄県立博物館に寄託された久米島の「上江洲家文書」と旧首里士族の「田名家文書」を調査し、そのなかの地図・絵図関係資料について閲覧を行った。また琉球大学附属図書館所蔵の風水図に関する調査も行った。平成９年度も風水絵図関係の調査を引き続き行っており、資料の整理に取り掛かっているが、残りの期間で名護市久志の棚原家所蔵「佳城絵図分金」ならびに伊是名村銘苅家所蔵「伊平屋島玉御殿御風水所遠山之図」について、また、併せて那覇市史編集室における家譜資料についても調査を進めた。
担当者はこの二年間で、所蔵機関の悉皆調査ではなく、「風水絵図関係」という主題に沿った調査を行ってきた。風水絵図関係資料は、主として博物館への寄託や個人所蔵となっているものが多いため一個所にまとまって保管されていることは少ない。また保管されていたとしてもそれらの多くは整備中の状況にあるため、資料全体を一通りめくって目を通すことから始めねばならなかった。しかしながら、これまで公にされることの少なかった風水師による彩色の素晴らしい墓地風水絵図を実見でき、写真では判読不能な文字群や樹木群、山々の濃淡による描き分けなどを微細に観察し調査を行うことが出来たのは大きな収穫であった。一方、那覇市史編集室には、すでに『那覇市史』の家譜資料篇公刊のおりに掲載された墓地絵図などが複写版ではあるが保管されているため、まとまった閲覧が可能である。これらの多くは墨単色によるものであって、さきの色彩豊かな絵図とは対照的である。また那覇市史編集室には墓敷証文に附属する絵図もいくつか残されている。なお、沖縄県立博物館所蔵の寄託分以外の絵図類については、すでに博物館側で撮影済みのものであれば貸借可能である。琉球大学附属図書館の宮良殿内文庫「自分墓地フンシー見取図」については以前に調査を行っており、その成果の一部は公表済みである（人文地理 46-5,1994）が、その継続調査も行った。今回の調査により沖縄に現存する風水関係図のおおよその分類と項目分けが可能になるものと思われる。
<情報化資料の概要等>
(1)琉球大学附属図書館（宮良殿内文庫の一部）
「自分墓地フンシー見取図」
石垣島の旧家・宮良殿内に伝えられてきた近世文書が琉球大学附属図書館に寄贈されたが、その中に収められた絵図資料のうちの一つ。墓地の敷地選定の際に風水師が作成したものと思われる。
(2)沖縄県立博物館（上江洲家文書（寄託）および田名家文書（寄託）のみ）
「山形図（仮）：山田之御墓か」（田名家文書）：墨の濃淡を使い分けて描かれた墓地近辺の風景画。墓地は石垣積みの箇所と黙されるが、詳細は不詳。
「上江洲家美里川墓之図」（久米島上江洲家文書）：1831 年作成の墓地風水絵図。掛軸仕様となっている。久米村風水見・高嶺里之子親雲上により作成。墓地の敷地内の寸法図を囲むようにして坐向の樹林・山並み、墓敷両脇の樹林帯を色彩豊かに描いている。また、風水判断の記事も墨書されている。
「墓地見取り図（仮）」（久米島上江洲家文書）：美里川墓之図では墓そのものの表現は省略されていたが、これは亀甲墓のスケッチと各部位の寸法を細かに記載している。スケッチは墨、寸法表示は朱で

描かれている。同じく高嶺里之子親雲上の手になるもの。
(3)那覇市史編集室
　いずれも「『那覇市史』所載の風水図（単なる針図は除き、若干でも風景描写の有るものについては採録した）
(4)棚原家（棚原繁男：名護市久志、12 月に調査予定）
「佳城絵図分金」：久米島の上江洲家の墓地絵図と共通する構成。近世末期の風水師による絵図と思われる。
(5)銘苅家（伊是名島）（町田先生を介して現在連絡中）
「伊平屋島玉御殿御風水所遠山之図」：伊是名島に現存する第二尚氏王朝の開祖尚円一族の陵墓である玉御殿（たまうどぅん）からその全景を描いた図。墓そのものを描かず、その前面に広がる風景を描いた図は珍しい。